
哀をください

加々美由亜

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

哀をください

【Nコード】

N4512D

【作者名】

加々美由亜

【あらすじ】

少年は悲しいという感情を持つたことがなかった。欲しいと思っただことはあるが、泣く事も、本当に悲しむ事も、寂しむ事も、結局は出来なかった。これはそんな少年が自分に降りかかる悲劇に立ち向かう姿を描く物語。

プロローグ

2063年3月26日。とある人物の葬儀が行われていた。坊主が死者を送るための念仏を唱え、静かな空気を漂わせている。

その死者の遺族の中では、静かに泣いたり、ただ歯を食いしばりながら涙を流すのを耐えている者たちがいた。

そのなかで、ただ一人、静かに泣くことも、涙を耐えることもせず、まるで捨て犬でも見るような目で、その死者の遺影を眺めている者がいた。

それは着ている黒い喪服とは反対に、白い髪をした、12、3歳ほどの、まだ幼さ残る少年だった。少年はただ、

（案外もういんだな、人間って……………）

それしか考えていなかった。悲しいよりも、可哀相よりも、まず一番にそういう考えが浮かんでいた。

例えその死んだ人物が自分の母親であっても。

（これからのご飯、自分で作るのか…………面倒だな…………。あ、ほかのもか…………）

こんなことしか考えていないと知られたら、葬儀中に発言されたら遺族全員から反感をくらうだろう。

でも、本当にそれくらいしか思えないのだ。悲しいとかの感情を、彼はとうに忘れている。

いや、忘れているのではなく、その感情を持ったこと自体。今までないのかもしれない。

少年は幼い頃からそうだった。いろんな物を壊したとき、怒られてもなんとも感じず、誰かから殴られたり蹴られたりしても、泣く事はなかった。

少年は思った。否、悟った。悲しいことなんてこの世には一つもないのだと。

プロローグ（後書き）

ども、新作です（あ、名前じゃないですよ？）！新作といってももう原稿は既に出来上がっている前後編の短いお話です。このお話はこの作品のみでも見れますが、僕がもう一つ書いている小説の番外編としても見れる作品です。では今はこの辺で。とりあえずこれはプロローグです。すぐに前編を投稿するので少々お待ちください。

前編

とある日の昼頃。 正確には12時17分。

少年は自分の通う学校の教室の中で自分の席のイスに腰を下ろしながら、教科書を読みながらまさに教科書どおりに授業を進めている教師の説明を聞き流す。

少年の名前は戸塚雪奈。 背中辺りまで伸ばした髪の毛の色が雪のような白色であること以外はいたって普通の少年だ。

雪奈はふと、教室の窓から覗かせる景色を見てみた。 そこに映るのはただの何の変哲の無い校庭と、それを挟む様に建てられている新校舎。

毎日のようにずっと見ているこの光景は単に暇つぶしのためであり、面白くはなんとも無い。

（ホントにつまんね……）

自然に出てきた欠伸をかみ殺すと、不意に後ろの席から声がかけられた。

「雪くん、先生の話ちゃんと聞いていなきゃダメだよ？」

声を掛けてきたのは同じクラスであり、小学生のころからの幼馴染である、広野理紗という少女だ。

少しウェーブのかかった亜麻色長い髪の毛と、小動物のような目の癖に猛禽類のような鋭さを感じる栗色の両目。 自分より相手のほうをとにかく優先するお節介さが特徴な奴である。

さらに、雪奈のことを雪君と呼ぶ変わり者だ。 見た目は可愛いのに、いろんな部分で勿体無い女である。

雪奈そいつに顔を向けないで、ノートの一部を引き裂いて、そういえばの感覚で持っていた左手のシャーペンを走らせる。

それを丸めて、捨てる感じに理沙へ投げた。 理沙がそれを広げる音が聞えたが、直後におそらくそいつから放たれたであろうグーが雪奈の背中をどついた。

痛いとしかいいない衝撃を喰らった雪奈はさすがに振り向き、理沙の顔を見据えた。

「なんだよ！ いきなり宣戦布告かコノヤロウ！」

「コノヤロウじゃないでしょ！ちゃんと授業を聞きなさい！いくら頭が良いと言っても、いずれはついていけなくなるよ？」

これだ。こいつのこういうお節介を雪奈は10年間、受けてきた。実はこれが原因で、女相手に本気の殴りあいになったのはもう思い出したくない。負けたから。

ちなみに、言い争ってはいるが、小声でやっているので、一応教師には気付かれていないみたいだ。回りの生徒は注目しているけど。「ふん。ついていけなくなったと思ったときに頑張れば良いだろ。勉強なんて」

「そんな考えはよくないよ！雪くんはやればなんでも出来る子なんだから今頑張りなさい！」

「はあ……………つざ……………」

「何か言った？」

雪奈は最後の言葉だけ無視し、仕方なく諦めて黒板に書いてある文字を書き写すことにした。これ以上言い争っていたらいずれは大声を出して教師に怒られそうだから。

「あ、そうだ雪くん」

再度声を掛けられて、雪奈はウンザリした気分になったが、一応振り向いた。

「目が怖いから笑いなさい。ウザイって言葉が顔に出てるよ」

「とりあえず、用件を聞かせろ」

するといきなり理沙が少しだけ頬を赤らめて、若干上目遣いでこっちを見てきた。こんな表情、今まで見たことが無い。

可愛いとは思えたが、見たことも無いコイツの表情を見て、警戒心がMAXギリギリまで上っている。

「お昼ご飯一緒に食べようね。いつもの屋上で」

何かと思えば、昼飯の誘い。いつも一緒に食べているのに何をそ

んなにあらたまっているのだろうか？

「ああ、ノート写し終わってからいくから、ちょっと待ってるよ」
「うん」

理沙の言葉を最後にして午前の授業の終わりのチャイムがなった。

日直の号令により全員が教師に礼をして、完全に午前の授業を終了とした。

雪奈が未だにノートを写している中、周りのクラスメイト達が食堂に行くなり、机を集めて昼飯の準備をし始めた。

「じゃあ、雪くん。私、先屋上行っているから」
「あいよ」

理沙がなんだか嬉しそうに弁当箱を片手に持って走って教室を出て行く。

いったい理沙にとって何がそんなに嬉しいのだから雪奈は少し考えてみる。

自分の、又は理沙誕生日ではない。自分の誕生日は2ヶ月後だし、先週あった理沙の誕生日には嘘のプレゼントとしてメリケンサックをプレゼントしたら、即効そいつでぶん殴られたから。ちなみに、後で本命のペンダントを贈ったからなんとか機嫌は治せたが。

「ま、行ってみりゃ解るか」

そっちのことを優先して雪奈はまだ内容を全然写していないノートを机に放り込み、鞆の中の弁当箱の入った袋を片手に教室を出た。屋上は歩いて一分もかからないほど近くにある。まさに一瞬でついた。

ポケットに入っている屋上用の鍵を差し込んで、屋上の扉を開ける（ちなみに、この屋上の鍵は雪奈が職員室の鍵を写真で撮って複製した物であり、理沙も同じ物を持っている。）。

扉を開けた瞬間、大きいが心地のよい風が雪奈を包み込んできた。

一度だけ、その風を感じるように目を瞑って両手を広げた。実に気持ちが良い。

「早かったね」

狭い屋上の奥に自分に向かって手を振っている理沙の姿を見つけた。弁当箱を空けていないところを見ると、待っていてくれていたらしい。

「サボったからな」

「戻りなさい」

理沙のその命令を無視して、雪奈は彼女の隣に座り込んだ。一瞬睨まれた気がするが、気にしない気にしない。

「おまえさあ、何時も勉強勉強って言っているけど、勉強の何が楽しいわけ？」

弁当箱の包みを空けながら言う雪奈のその質問に、理沙は思いつきり深く溜め息をした。

「好きなわけないでしょ、勉強は後に役立つからするものなの。

正直、私も嫌いだってば！」

「だったらやんなくても良いんじゃない？ 正直、役に立つってのも微妙だろ。

将来の夢に対してだったら、専門学校でも行けば良いし、やりたくないものがないは一生フリーターやってるくらいだしな」

「……………最近の日本がダメなのは雪くんみたいな人が多いからなのね」

何か本当に嘆いているような表情をしながら頬に手を当てる理沙。え？ それ失礼じゃね？ しかも間違っている気がしないのが少し悲しい。さて、そろそろお腹がすいてきたので包みを開ける。

中身は黒ゴマをまぶしてある白いご飯が50%。卵焼き、ウインナー、ホウレン草のおひたしなどの一般的なおかずたちが50%で成り立っているありきたりなお弁当だ。

ありきたりで簡単なうえ、手抜きすら感じられるが、これを作ったのは雪奈自身だ。

雪奈はもともと母親と二人暮らしだったうえ、一昨年、入学と同時にその母親を亡くしてしまったのだ。こんな中身のお弁当なのはそれのせい。

料理が出来ないわけではないが、別に面白いわけじゃないし、朝早くおきて作るのは正直ダルい。

「面白くないお弁当ね」

理沙が雪奈のお弁当を覗き込んで言う。

「そりゃ、お弁当は面白い物じゃないだろ。美味いかどうかだろ。」

「いや、そういう問題じゃない気もするんだけど……」

「ま、美味くもないから、確かにそれ以前の問題だよな。俺に比べ、お前の弁当と来たら……」

雪奈は理沙のお弁当の中身を覗いてみる。なんということでしょう。雪奈の弁当の中をリフォームしたとしても、このように可愛いらしいお弁当に仕立てるのは不可能だろう。

「お前が俺の弁当を毎日作って来てくれたら、すごく助かるんだけどな……」

雪奈は理沙の弁当の中を見て思わず本音をこぼす。すると、理沙の顔が見る見る赤くなっていった。雪奈はしまったと思って、口を手で押さえた。

おそらく理沙は怒ったのだろう。自分でどうにかするべき部分を頼ったから。

すると理沙は勢いよく顔を上げて、雪奈にその愛らしい顔をグイッと近づけ、

「作ってあげようか？」

と、イタズラっぽくニツと笑いながら言った。一瞬幻聴かと思った雪奈だが、すぐに現実の言葉だと確信した。

「マジで？」

「マジだよ？」

「その代わり！」と付け加えて理沙は続ける。条件付か？ まあ、いい。多少のことくらいは勘弁してやる。何でも来い！

そう思った瞬間。雪奈の唇に理沙の唇が重ねられた。柔らかい感触と同時に、理沙の小さな舌が自分の舌に一瞬だけ触れる。

しばらくその時間が続いたあと、理沙は唇を離した。お互いの唇が離れた時、銀色の糸が結ばれていたがそれはすぐに切れてしまった。

それが終わった後も、雪奈は信じられないような顔をしている。

それを見て理沙はクスクスと笑った。

「これが代わり。お弁当作ってきてあげるから。私と付き合いなさい」

そう言う。理沙は弁当を再び食べ始める。雪奈はただ呆然とするしかなかった。

放課後、色々聞きたかったこともあって、理沙と一緒に帰ることにした。まあ、もともと自分の家と隣同士なので帰りは殆ど理沙と一緒になのだが。

理沙はすぐくろんろん気分で雪奈の隣をややスキップ気味に歩いている。校門を出て、一番最初に行き当たる信号が赤だったので、止まると同時に雪奈は一直線に聞いてみることにした。

「お前、何で俺なんかと付き合いたいなんて思ったんだ？」

「え？好きだからに決まってるじゃない」

当たり前のように返してきやがった。雪奈は呆れて溜め息を吐いてしまった。

信号が青に変わると、理沙と同時に歩き出し、もう一度理沙に問う。

「だとしても、俺のどこが好きになったんだよ」

「え？えっとね……それは！」

雪奈は理沙の返答を聞くことが出来なかった。理沙に突き飛ばされたのだ。否、信号を無視して走ってきた自動車に体を突き飛ばされた理沙の体が自分に衝突したのだ。

自分の背中が硬いアスファルトに衝突し、激痛を感じたが、雪奈はそれを無視し、自分を優しく包み込むような形でもたれかかっている

る理沙に衝撃を感じた。

どうやらブレーキ中だったらしく、そのおかげで雪奈ごと轢かれる事はなかったが、そんなの問題ではない。

今の理沙の体は真赤な粘液に覆われていると感じるほど血に塗れ、白と青で配色されたセーラー服はそのせいで異様な色に変色している。

右足はおかしな方向へ曲がり、左足にいたっては膝から下が無く、それは右およそ4メートルのところに転がっている。

「理紗……………」

雪奈は驚きのあまり、かれた声を出すので精一杯だった。目の前の深淵よりも深い絶望的な光景に何も言葉を出すことが出来ない。

「理紗!!」

自分にもたれかかる少女の名を必死に雪奈は叫んだ。周囲に人が集まり、自分達に色々な種類の視線を向ける。

それには哀れみ、驚き、その二つしかなかったが、そのどちらも、雪奈のにとっては集るハエよりも鬱陶しかった。

「見るな!!」

思わず叫ぶ。見るな観るな視るな。そんな目で俺達を見るな。

これは違う! 違うんだ! これは夢だ! 嘘だ! 幻想だ!!

!

「雪くん……………」

鈴の音のような涼しさを感じる声を聞いて雪奈はハツとして、今まで自分の胸元に顔を伏せていた少女の顔を見る。その少女の目は虚ろで、もはや生氣すらうかがえない。

少女は雪奈に向けて口を動かした。

「私はね……………くんの……………ね……………」

微笑んで自分に何かを言おうとしている少女を目にして、

「うわああああアアアアアああああアアああああアアああああアアああああアアああ!!……………」

雪奈は絶叫した。心からではなく、心と一緒に。悲しみではな

く、驚きによる。

しばらくそうしていると、雪奈の意識は断ち切られるように途絶えてしまった。

前編（後書き）

スイマセン。すぐ出すとか言っておきながら編集とかにてこずってて遅れてしまいました。

後編もおそらく同じことになるでしょう。でも一週間以内には出すつもりです。

前回も言いましたが、これはオリジナルとしても、僕のかいているもう一つの作品の番外編としても読める物語です。これを読んで、え？どこが？と思った方はちょっと待ってください。いずれそこら辺のお話を投稿します。

さて今回はこの辺で。今度はもう一つの作品の後編の方、またはもう一つの作品のほうでお会いしましょう！感想や評価、アドバイスなどをお待ちしております！

後編

気が付くとそこは病室だった。　どこの病院かはわからないが、自分の下にある硬いベッドがこれを含めてこの室内に4つある。

雪奈は思考を回復させる。　今まで何があつたのか。　自分の身に何があつたのか。

そして思い出す。　理沙のことを。

「理沙……………　っ！」

体を起こしてどこかにいるであろう理沙の元へ行こうとするが、全身に激痛が走り、それ止められてしまい、背中をベッドに打ちつける。

今気付いたが、様々な箇所には包帯が巻かれている。　一番マズイのは肋骨だろうか。　そこに一番激痛を感じた。

「くそ……………」

あいつのそばにいたい。　今アイツはどういう状況なのか知りたい。　なのに、今そうすることが出来ない。

悔しさが胸の中で広がり、思いつきり叫んでやろうかと思ったとき、不意に病室の扉が開いた。

「目が覚めたのか……………　良かった良かった……………」

入ってきたのは三十代前半の顔立ちの良い男だった。　用箋挟で固定された書類を脇に挟み、地服装は私服だが、上に白衣を着ていることから、医者なのだろうと雪奈は思った。

男は雪奈の顔を見て一度微笑んだ後、ベッドへ歩み、近くにあつた見舞い人用のイスに腰掛け、脇に挟んであつた用箋挟に固定された書類を眺める。

「左足の脛骨を骨折。　右膝関節の損傷。　右肩の脱臼。　思ったよりは重症だけど、意識がすぐに戻ってよかったよ」

男の白衣の胸部分には垣本というネームプレートがついてある。

雪奈は名前を確認すると、垣本の言葉を見無視して問う。

「理沙の………広野理沙の様態を………教えてください」

垣本は一瞬面食らったような顔をするが、雪奈の表情を見ると、表情を険しくする。

「正直、危ない状態だね」

垣本は書類を3枚ほど捲って続ける。　おそらく今読んでいるのは雪奈ではなく、理沙の資料だろう。

「骨はモチロンだが、内蔵が複数損傷している。　さらに呼吸も困難な状態だ。　生きるか死ぬか今の状況では何とも言えない」

（そんなんっ！！）

理沙が死ぬかもしれない。

雪奈は今すぐにでも理沙の元によって声を掛けてやりたい気持ちに追いやられるが、自分がそんなことをしたところで現状が変わる分けないということを悟ると、理沙の元へ動こうとする体を必死に押さえつけた。

「祈るしかないんですか……？」

雪奈自身こんな事言うのは信じられなかった。　こんな時でさえ、悲しみじゃなくて、哀しみじゃなくて、悔しさしか表さない言葉は、自分自身を許すことが出来なかった。

垣本は雪奈の何かを察したのか、雪奈の耳に届く位の大きさでポツリと呟いた。

「そうだよ」

と。

それは、まだ若干14歳の少年が聞くには重くて鋭すぎる言葉だった。　雪奈は自分を覆っているシーツを思いつき握った。

悔しい。　何で自分はその程度なのか。　もっと考えろ。　自分に出来ることは何なのか！

そういう考えが脳を過った瞬間、垣本は残酷な一言を次げた。

「『他人』がどうこう出来るような問題じゃない。　治そうとする以外は、もう祈ると言う方法しか残っていないんだ」

雪奈は自分の胸に氷柱が刺さったかと思った。　感じたのだ。

絶望を。

それは哀しみではなく、悔しさと、驚きと、情けなさから出来ている、本当にどうしようもないくらい絶望。

垣本はイスから腰を上げると、「とりあえず、君は安静にしていなさい」と言い残して病室を出て行った。

今の雪奈には、垣本の言葉も、扉の閉まる音も、耳になんて入っていなかった。聞えていないのではない。届かないのだ。あまりにも深いところに居るせいで、辺りの音が完全に遮断されているような錯覚に陥っている。

（俺はどうすれば良いんだ……………）

祈るっっているだけなんて、それだけじゃ理沙の容態は変わらない。

意味が無い。

（くそ……………）

自分に対して叱咤すると、また病室の扉が開いた。垣本ではなかった。入ってきたのは二十代後半と思われる真面目そうな男性だった。

雪奈は全身に響き渡る激痛に耐え、何とか上半身だけを起こした。

「こんにちわ」

男性はそういったが、ギコは彼に見覚えが無かった。とりあえず「こんにちわ」と返しておく。彼は気まずそうな顔をしながら歩み、先ほど垣本が座った近くの見舞い人用のイスに腰掛けた。

「本当にすまなかった」

いきなり、雪奈にそういつてきた。わけが解らないので誰なのか尋ねると、彼は名を木下と言うらしく。理沙を引いてしまった張本人だと言った。

友人から掛かってきた電話に夢中になってしまい、信号に気付かずに理沙を轢いてしまったらしい。とっさに気付いたのは、ある意味奇跡だったのだろう。

雪奈はそれら全てを聞き終えた後、一瞬だけ憎悪を覚えたが、責める気に離れなかった。

確かに悪いのは彼だ。 他に悪い者はいない。

だが、彼は「すまない」と何度も言いながら顔をぐしゃぐしゃにして泣きじゃくり、反省し、こんなにも悲しんでいる。 哀しんでいる。

『他人』であるはずの彼が、こんなにも近い立場に立っている自分よりも、ずっとずっと悲しんでいる。

雪奈は「もういいです、帰ってください」と重い口調で言った。

雪奈は彼を見るのがとても耐えられなかったのだ。

木下はもう一度「すまなかった」と言うと、病室を出て行った。

病室を出て行ったのを確認すると、雪奈はベッドの手すりを思いっきり殴った。 手に激痛が走るが、そんなの気にもならない。

「なんで……何で俺は悲しめないんだよ……」

おもわず、そう呻く。 雪奈はもう一度手すりを殴った。 そしてもう一度、もう一度、もう一度。

「なんでだよ！ 何で悲しめないんだよ！ 何で涙が流れないんだよ！ 何で悔しさしか生まれないんだよ！ こんなにもなつて！！」

そしてもう一度手すりを殴る。 ミシツという嫌な音が、自分の手からではなく手すりから響いた。

「……………」

雪奈はうな垂れ、全身の力を抜いた。 何となくの感覚で窓のほうを見てみる。

今気付いたが、外は雨が降っていた。 しかし、窓は向きのせいかな、全く濡れていない。

カーテンを閉めようかと、雪奈が激痛に耐えながらベッドから身を伸ばし、手がカーテンに先に触れた瞬間、一滴の雫が窓に当たった。 それは丁度、窓に映る雪奈の右目の当たりに。 目線だけをそちらへ向け、雪奈は驚いた。

（俺が…………泣いている？）

そう見えた。 窓に映る自分は一滴の涙をたらし、泣いている。

雪奈はそれを見て引き戻されるようにベッドに身を引き、仰向けになつて自分の目を押さえる。

（俺が泣いている……………？ 冗談だろ？）

しかし、少年の心を少年の目は裏切つた。

今の雪奈の目には、本当の涙がこぼれている。ボロボロと、涙腺が崩壊したみたいに大粒の涙が溢れ、少年の顔を濡らす。

（ははは……………理沙……………俺……………）

少年は自嘲気味に笑つたが、すぐにその表情は崩れさらに涙が溢れ出した。口からは嗚咽が漏れ、心には亡くなつた母の哀しみも今更になつて足された。

そして同時に悟つた。今まで彼は哀しめなかつたんじゃない。

『哀しみ方を知らなかつた』のだ。だったら今知つた。覺えた。遠慮することはもう無い。今はとにかく泣けば良い。哀しめば良い。さあ、全力で泣け。

「うああああああああああああああああ！！！！！！」
悲鳴に近いくらいの絶叫を、彼は全力で叫んだ。

（やっと泣けたよ……………）

シーツを掴んで自分の顔を隠しても、彼は叫んだ。喚いた。吼えた。自分の心を初めて味わつた悲しみの感情に染めて、

（やっと悲しめたよ……………本当に哀しめたよ……………）

彼はただ泣き続けた。

入院してから一週間。足はまだまだが、腕と肩は治り、雪奈は松葉杖を使つてだが、病院内を動き回れるようになった。

雪奈が一階のフロント前のテレビでワイドショーを見ていたとき、後ろから声を掛けられた。

垣本だつた。彼は雪奈に「おいで」と言つて、歩いていく。雪奈は不思議に思いながらも、松葉杖を使って着いていった。

3分もしない内についたのは、大きな扉の前だった。顔を上げてみると、そこには手術室と書かれたプレートがある。

まさかと思い、雪奈は垣本を見るが、垣本は何も言わずに手術室の扉を開けて、中へ入っていく、雪奈も黙って入り、垣本に着いていた。

中に入ると、金属で出来た手術台に、シーツを掛けられた状態で寝かされている少女がいた。それをみて雪奈は目を大きく開いた。

見間違ひようも無い。

あれは……………。

「会いたかつたろう？」

「理紗……………」

雪奈はゆっくりと理紗のほうへ近づく。彼女は目を瞑り、浅い呼吸を繰り返しながら、動くことなく眠り続けていた。

「なんとか…手術は成功したよ」

「……………」

垣本の言葉で、雪奈は全身の力が抜けたような気がした。生きてる……………理紗は生きてる！！

しかし、葉月は一つのこと気が付く。その瞬間、垣本は今まさに雪奈が抱いた疑問に答えるように、

「手術はね」

と言った。

雪奈は振り返って、垣本を見据えた。

「どういふことですか？」

「言った通りさ、手術は成功した。見ての通り、切断された足も100%には至らないが元に戻せた」

「じゃあ、何が……………？」

「……………」

「うつ……………」

垣本は何か言おうとしていたがその前に、雪奈の傍で呻き声が聞こえた。

声の元へ顔を向けると、そこには眠そうな顔で電気のついていない照明を見上げている理紗がいた。

「理紗……………」

雪奈は杖の突いていない右手で理沙の頬に触れた。よかった。こいつは生きていた。自分の大切な物は壊れなかった。

しかし、

「君……………だれ……………」

「え……………」

雪奈は自分の中で何かが崩れていく様な気がした。手が理沙の頬からゆっくりと離れダランと情けなく落ちる。

「どういうことだ……………」

雪奈の呟いた疑問は、すぐに返ってきた。

「見ての通り、記憶喪失ということだ」

絶望の形で。

垣本は表情を微塵も変えないまま続ける。

「シヨックによる物だろうと推測されている。まあ、それ以外は無いだろうがな。

また、彼女は自分が誰かなのかも理解していなかったが、知識はちゃんと脳内で残っている」

「つまり」と付け加えて、垣本は冷静に告げる。

「消えてしまったのは、人物との繋がりなんだよ。君の事は当然覚えていない」

「……………それは……………理沙が……………理沙じゃなくなったって事ですか……………」

「……………」

雪奈は呟くが、垣本は口を開かない。

その態度に腹が立ち、雪奈は松葉杖を片方捨て、左手で垣本の胸倉を掴んだ。垣本をまっすぐに睨み、叫ぶ。

「なんでだよ！！ あんた医者だろ！？ 治してくれよ！ 返せ！ 治せ！ 理沙を元に戻せ！！！」

「君は現実から逃げるきかい？」

垣本は掴み上げられても、表情を崩さずにただ目線だけをギョロリと動かし、雪奈を見ている。

「僕たちの力が足りなくなっただけで起こしてしまった結果なのはモチロ
ンだ。」

だが、僕たちはこの現実逃げるつもりは無い。絶対にもとに戻す。

医者だからね」

垣本の表情は一瞬も崩れなかった。感情がこもっていないようにも見えたが、彼の言葉にはものすごい決意に満ち溢れていた。

雪奈は言葉を失い、ゆつくりと垣本から手を離す。

「君も逃げるんじゃないで手段を見つけさい」

「……………」

雪奈は本当に何も言うことができなかった。視線は垣本の顔から床へとゆつくり落ちて行き、俯いたとき、

「では、他の仕事があるので、僕は失礼するよ」と言っ、垣本は出て行った。

ボタンと言う手術室の扉が閉まる音と共に、雪奈は今度は全身の力が抜けたような気がした。いや、本当に抜けた。

松葉杖から腕が滑り落ち、雪奈はそのまま後ろへ尻餅をつく。

「ははは……………」

変な笑い声が口から漏れた。手術台を見上げれば、そこには自分を不思議そうに見下ろしている少女が、「どうしたの？ 大丈夫？」と手を差し延べている。

「理沙……………」

雪奈はその手に触れようとしたが、その直前、自分の手が凍ったように動かなかった。

この手は理沙のものだ。 だけど違う。 俺の知っている理沙ではない。 これは、理沙ではない！

腕の力さえも抜け、落ちそうになる。 しかし、雪奈の腕が落ちる前に理沙の手がそれを掴んだ。 まるで、絶望から救う天使の手が、

少年に差し出されたように。

「ねえ、君の名前、教えてくれない？　どうしても思い出せないの………自分のことさえ………」

あなた、私の事知っているみたいだし、教えてほしいの。　私がどういう人なのか………これから何をすれば良いのか」

理沙は微笑んで雪奈に言う。　この時、雪奈は返答に迷ったが、すぐに答えを見つけた。　そんなの一つしかなかったから。

「ああ、いいよ。　思い出せないなら仕方が無い。　また忘れることになったとしても、また教えてやる」

今の彼女の記憶には彼は刻まれていない。　だけど、もう一度刻むことは出来る。　振り出しに戻って、また、元の二人に戻ろう。

悲しみに哀しみ、哀を知った自分は、今までとは違うかもしれない。　完全には無理だけど、また君との関係を取り戻したい。

だから少年は心を込めて、心の底から言う。

「俺は、戸塚雪奈だ。^{とつかせつな}　雪^{ゆき}って書いて、奈良の奈^{せつな}って書いて雪奈」
この瞬間、少年の名は、少女の心に新たに刻まれた。　おそらく、その名はもう少女の心からは消えることは無い。

だから少女は心を込めて、心の底から言う。

「解った。　じゃあ、これからヨロシクね、雪^{ゆき}くん………」

今、彼女の記憶の最初のページが書き始められた。

新たなる物語として。

後編（後書き）

いろんな部分で気に入らないところや、矛盾している箇所があったので、消去して新しくしました。

改めて、『哀をください』。これで完結です。最後まで読んでくださった方々、ありがとうございました！

もう片方の『呪をもらって魔法学園生活』もヨロシクです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4512d/>

哀をください

2010年10月11日04時56分発行